E113

防災教育のビジュアル・エスノグラフィー
Visual Ethnography of Disaster Education

○中野元太・矢守克也
○Genta NAKANO, Katsuya YAMORI

The paper aims to introduce the visual ethnography method into the representation and evaluation of the action research for disaster education. Visual ethnography of action research is distinct from the standard type of visual ethnography in the following three aspects. Firstly, it can minimize the effect of asymmetric relationship between the researcher and informants during the filming. Secondly, the ethnographic description of the film emphasizes the social changes brought through the action research. Thirdly, developed films are watched with the participants of action research and the additional interviews of the participants on the film are integrated into the ethnography in order to represent and evaluate the action research not only by the researcher, but also by the participants.

１．はじめに

エスノグラフィーは厳密な文化の記述を目的とする。しかし『文化を書く』[1)]が指摘する通り、どれだけ科学的とみなした手続きを用いて観察し、研究者が可能な限り客観的記述を心掛けたとしても、文化の正確な記述たるエスノグラフィーとはなりえない。それは、研究者と研究対象者との間の非対称な権力関係に基づく観察、記述プロセスにおける意識的・無意識的な文化の取捨選択、研究者のレトリックの制約、これらの要素によって、エスノグラフィーは部分的真実のみを描くことになる。エスノグラフィーへのこうした批判から、記述にのみ依存しないエスノグラフィーの手法として写真や映像を取り入れること、すなわちビジュアル・エスノグラフィーが注目された[2)]。

ビジュアル・エスノグラフィーには映画誘発法（研究対象者を撮影し、撮影したものを研究対象者に見せる）、対話的ビジュアル・エスノグラフィー実践（保育者の実践を映像で記録し、その映像を見ながらインタビューを実施する）、博物館映像学、観察映画など様々な手法が提案されている。

２．アクションリサーチの撮影

本研究は、ビジュアル・エスノグラフィーをアクションリサーチの表現手法として用いる試みである。筆者は 2016 年から 2019 年までの間、メキシコ合衆国ゲレロ州シワタネホ・デ・アスエタ市に 200 日以上滞在した。その間、シワタネホ市防災局職員らと学校や地域を訪問し、合計 82 回、1 万人以上を対象に様々なタイプの防災教育を実践した。筆者は家庭用ビデオカメラを使用して、防災教育実践および関係者インタビューを随時撮影した。約 4 年間に撮影した映像は合計 140 時間を超える。

アクションリサーチの撮影の特徴は撮影者（筆者）と被撮影者（シワタネホの人々）との関係性にある。通常のビジュアル・エスノグラフィーやその他の映像表現でもそうだが、研究者が研究対象者のエスノグラフィー撮影を行うとき、研究者と研究対象者との間に、評価する／評価される、観察する／観察される、知識人／非知識人といった非対称な関係から逃れることができない。一方、アクションリサーチの撮影は、エスノグラフィーの対象者と、数百日間の時間をともに過ごした研究者（筆者）による撮影であり、共同当事者の関係にある。すなわち、評価する／評価される、観察する／観察されるといった権力関係を最小化しており、この点において、アクションリサーチの撮影は、その地域で取り組まれる防災教育実践をありのままに記述・表現することに近づく。

３．アクションリサーチの映像編集

4 年間の防災教育の実践を記録した 140 時間超に及ぶ映像は、シワタネホにおける防災教育の変化・発展を表現している。ここにアクションリサーチにおける映像編集の特徴がある。たとえば、2016 年には専門家主導の一方向型で防災教育を推進していたシワタネホ市防災局職員は、2017 年、2018 年と次第に参加型防災教育を取り入れるようになったことが表現される。2016 年には防災局

職員や筆者ら専門家に防災教育を任せっきりにしてしまう依存的態度を示していた学校教員らが、防災教育に継続的に関与していく中で、次第に主体的に防災教育を推進するようになったことが表現される。膨大な映像からこうした変化を筆者ら研究者が解釈し、「映像１：防災局職員を通してみる防災教育のダイナミズム」「映像２：防災局職員を通してみる地域防災のダイナミズム」「映像３：先生を追う―ビセンテ・ゲレロ小学校での４年にわたる防災教育実践―」「映像４：エヴァ・サマノでの多様な防災教育実践」といった変化を映像によって記述するビジュアル・エスノグラフィー映像作品７本を編集・制作した。図１は、映像１の一部である。

図 1.防災教育の変化・発展を示す映像作品１

ここで注意しなければならないのは、いかに撮影過程においてミニマムな権力関係が実現され、ありのままの映像記述を実現したとしても、ビジュアル・エスノグラフィー動画として編集した視点は筆者（研究者）によるものであり、筆者が描く４年間のストーリーである。この点において、冒頭に述べた『文化を書く』による批判、すなわち研究者による主観的エスノグラフィーとの批判を免れることはできない。ここで再度、研究者が被撮影者らの実践を評価するという非対称な権力関係が生じることになる。

４．多声的なビジュアル・エスノグラフィーへ

こうした権力関係から再度、アクションリサーチのビジュアル・エスノグラフィーを解放するためのキーワードは多声性である。研究者による撮影と編集によってまとめられたビジュアル・エスノグラフィー映像を、映像に登場する共同当事者やシワタネホに関わる人々とともに視聴するという実践を行う。より具体的に言えば、映像１には、シワタネホ市の防災局職員がメインで登場する。その登場人物に映像１を視聴してもらい、映像１に対する感想・反論・映像に表現されていない現実等を語るインタビューを撮影し、映像１に追加する。すなわち、一声的であった研究者視点のビジュアル・エスノグラフィーに、防災局職員視点の声が加わるといったように、ビジュアル・エスノグラフィーの多声化を試みる。これによって、4年間繰り広げられた防災教育実践の多様な見方を確保し、アクションリサーチのビジュアル・エスノグラフィーとして４年間の防災教育実践と、実現した変化・発展をありのままに表現する。

５．ビジュアル・エスノグラフィーの可能性

多声的ビジュアル・エスノグラフィーをアクションリサーチに導入することは、アクションリサーチ評価手法の更新の可能性を示唆するものである。これまで、アクションリサーチにおける変化のエビデンスは論文（文章、質的エビデンス、量的エビデンス）という形式によって示され、言語を超えて実現してきた豊かな変化を矮小化・部分化せざるを得なかった。特に、防災教育は学習者の主体性形成や、学習者がわがごととして防災を捉える行動変容が重要視されるが、論文形式でこれらの変化を表現することに限界がある。エスノグラフィックな映像を変化のエビデンスとすることで、さらなるアクションリサーチの発展が期待できる。また、これまでの論文によるアクションリサーチ評価は研究者が研究対象者を評価する一方向的なものであった。ビジュアル・エスノグラフィーを用いることで、研究者が描くストーリーに研究対象者の意見・反論を加えた多声性を担保することで、新しいアクションリサーチのエビデンスを提示することができる。

謝辞

本研究は、持続可能開発目標達成支援事業（aXis)「海底地震観測と構造物脆弱性の知見を活かした津波避難教育プログラムのパイオニア的実証実験」（JPMJAS2009）の助成を受けたものです。

参考文献

1). クリフォード，J・マーカス，J，文化を書く，春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子（訳），紀伊国屋書店，1996.

2). Pink, S., Doing visual ethnography, Sage, 2013.